

# 赤い洋傘

阿 閉 生

獨逸の山地に貧しい樵夫が大勢の子供を抱へて住んで居りました。朝早くから夜遅く迄大きな木を伐り倒し町に運んで薪に賣り其の日其の日の糧を得て居ました。妻も子もボロを身に纏ひ三度の食に事を缺ぐ様な事も珍らしくはございませんでした。

或寒い雨の日の事でございました。いつもの様に子供等に留守をさせて樵夫は妻と稼ぎに出かけました。子供等が火のない爐を圍んでお化けの話をしたりマツチの棒で灰に繪をかいたり又はジャンケン遊びをしてゐる最中に倒れさうな戸を押し開けて靴音荒く一人の紳士が濡れ鼠になつて駈け込んで參りました。恐怖の念に驅られて一かたま

りになつて震へてゐる小さな子供等を親切さうな眼で眺めながら暫く雨の止むまで雨宿をさせてくれと願ひました。雨はます／＼烈しく降つて參ります。始めの程ははにかんで互の肩で顔をかくし合つてゐた子供等は紳士のやさしい態度に安心してか段々打ち融けて話をする様になりました。

「御父様も御母様も何處にゐらつしやるの」と聞かれて突然思ひついた様に一番年上の男の子が叫びました。

「父ちゃんも母ちゃんも雨にぬれてゐるだらうなああの洋傘を忘れて行つたんだ」

「洋傘があるのかい」

「エー、とても立派なの、見せてほしい？」

それ以上の洋傘を見た事のない末の女の子はさも誇らしげに大きな洋傘を抱えて來ました。見れば大きくて小さな小屋の屋根になり相てございまして。

「ネー、きれいでせう」

「借してくれませんか」

「道遠いの」

「さうね、一時間位かゝりませう」

「じゃ、貸してあげますが明日の朝きつと〜返してよ、母様に叱られるんだもの」

「よし〜返すとも、お金もつけて」

「それあ、小父さん、嘘だらう、口ばつかりだらふ」

「何でもよいから貸して呉れ」

「破つちやいけん、家のお寶物だ、父様が怒るよ」

口々に子供等はいひました、紳士は大事にする事を誓つて煤けた洋傘をさして雨の中を出て行きま

した。

此の紳士は一體誰でございませう。かくれもなき皇帝御自身でございました。下情に通ずるため時々御微行になるのでございました。

夕方樵夫は疲れた上ずぶ濡れになつて妻と歸つて來ましたが子供等はその日の出來事について一言も話しませんでした。

次の日は前の日よりもつとひどい雨でございました。洋傘を探しましたがどうしても見つからないので樵夫は短氣にどなりました。

「オーイ、野郎ども、あの洋傘をどうしたんだい」子供等は恐る〜見知らぬ紳士に貸した事を打ち明けました。

「へー、貸した、タ…タレに貸したんだいどんな人だつたい？」

「名をお聞きする事あ、すつかり忘れてしまつちやつた」

と兄がいひますと末の女の子は

「いゝ、やさしいお方だつたよ」

とつけ足しました。

「何といひ分けしたつて、あの大事な洋傘は決して己の手に歸らんから、……よいか！ これから家の物は藁繩一筋だつて己に無斷で人に貸しちや承知しないぞ」

とわめき立てながら表へ荷車の支度に出様といたしますと二頭曳きの金の御紋いかめしくまばゆきまでに光つてゐる馬車が止りました。そして中から二人の士官が重さうに何か大きな赤いものを抱えて出て來ました。

「陛下の御返しものでございます子供等に『よろしく』との事でござりました」

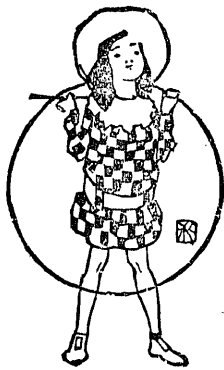
といひすて、又馬車に乗り込んで立ち去りました。

煤けた、大きな、赤い洋傘は擴げられてしかも

倒になつてその中に金貨銀貨が一杯輝いてゐます。

怒りの顔も泣き虫顔も忽ち和らぎ一同夢ではないかと疑ひ不思議な運を喜び、はては皇帝の御親切を心から感謝いたしました。

火の消え勝ちな爐も赫々と火が燃え雨の漏る屋根も葺きかへられ子供等のボロも新らしい着物に變り、破れたボロの荷車も新らしくなつて楽しく元氣に仕事にいそしむ事が出来る様になりましたが赤い洋傘の事を決して忘れず大切に家の寶として藏つて置きました。終り。



# お粥の洪水

七四

阿 閉 生

昔狸のお山に憐れな少女がお母様と細々煙を立てゝゐました。お金もない上に杖とも柱とも頼むお母上様が病氣でございました。いつもの様に山霧が霽れ切らぬ中から少女は薪を拾ひに出かけました。途々今日はうまく薪が賣れるか知ら。お米が買へるかしら、お母様はどうして早く癒つて下さらないでせうと何時の間にか涙を流して居りました。ふと涙にかすんだ瞳を挙げますと穢いお婆さんが杖を曳き曳き山を登つて來ます。お婆さんは少女の顔を覗き込みながら、

「嬢ちゃん！ 何が悲しいの」と尋ねました。

「お腹が空いて堪りません」

「どうして」と聞き返しますと

「貪乏で食べるものが何もございませんその上お母様が病氣で……」と後は噎り泣いてしまひました。

お婆さんは手に提げてゐた黒いお鍋を渡しました。

「御飯が欲しいならば是を竈にかけて『お鍋さんお鍋さん煮えなさい』とおつしやい。満腹になつたら『お鍋さん、お休みなさい』とおつしやい」

と言ひ終つたかと思ふ中にお婆さんの姿はもう見えなくなりました。

呆氣に取られた少女は急いで家に歸り早速お婆さんの言つた様に火をおこしてお鍋をかけ、

「お鍋さん／＼お始めなさい」といひますと果た

してお鍋はブツ／＼煮えておいしいお粥で一杯になりました。淋しいテーブルも今は賑つてお母様と二人生れて始めてお腹一杯食べることが出来ました。

翌日少女は又お山へ薪をこさへに行きました。

お留守をしてゐるお母さんは

「あの子も腹を空かして歸つて来るから」といつて真黒い圓いお鍋を火にかけて少女のした様にいたしました。お鍋はブツ／＼煮え始め、やがておいしいお粥で一杯になりましたが何といつたらお鍋が止まるか忘れてしまひましたのでお粥はあふれて籠もお粥だらけになり床に流れては小川のように表にまでドン／＼流れ出しました。町の人には「オーイ、オーイ、お粥の洪水だ／＼と叫びながら駆けつけて忽ちの中に人山を築きましたが只騒ぐのみで誰もお鍋を止める事が出来ません。大きな騒ぎを聞きつけて息を切らして歸つて來た少女

が

「お鍋さん、お休みよ」とどなりますと煮えくり返つてゐたお鍋さんは忽ちに止まりました。が長い間町はお粥の海となり、向ふ側につくには先づお粥を食べて道を開けねばなりませんでした。

今でも粥のお山にはこの黒いお鍋があるさうでございます。

## ○夏季講習會狀況

### 一、文部省主催の講習

八月二十六日より同三十一日まで毎日午前四時間東京女子高等師範學校に於て開催せられた文部省婦講習會は非常な盛況であつた。倉橋講師は不幸病氣のため欠席せられたが堀講師の歐米諸國に於ける保育事業の實際が七時間山形講師の幼稚園の手工が七時間、三浦、平田講師の幼兒に適用さ